

江吏部集試注（八）

木戸，裕子
鹿児島県立短期大学助教授

<https://doi.org/10.15017/10336>

出版情報：文献探究. 39, pp.37-45, 2001-03-31. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：



江吏部集試注 (八)

木戸 裕子

(承前)、(七)は『鹿児島県立短期大学紀要』第三十八号に掲載している。

凡例

一、底本は板本群書類従を用い、後述の諸本により適宜異同を挙げた。

一、校異では、逐一の異同を挙げるのではなく、本文解釈に関わるものだけを記した。したがって、異体字については挙げていない。

一、校異に用いた諸本と略号は次の通りである。

- 内閣文庫(旧浅草文庫)本―(内) 山口県立図書館本―(山)
- 陽明文庫本―(陽) 祐徳稲荷本―(祐)
- 静嘉堂文庫本―(静) 神宮文庫本―(神)
- 国会図書館本―(国) 無窮会図書館本―(無)
- 東大図書館(E45 656)本―(東A)
- 東大図書館(旧南葵文庫)本―(東B)
- 岡山大図書館本―(岡)

島原松平文庫本―(島)

東北大図書館本―(東北)

京大図書館本―(京)

多和文庫本―(多)

賀茂別雷文庫本―(賀)

名古屋市立鶴舞中央図書館本―(鶴)

本朝文粹(新日本古典文学大系)―(粹)

本朝麗藻(校本本朝麗藻)―(麗)

一、本文の漢字はできるだけ現行の字体に統一した。ただし、次の

漢字は底本の字体を尊重した。

煙・烟 花・華 叢・藜 窓・牕など。

一、割注など小書の部分は「」に入れて示した。

一、訓読文は必ずしも平安時代の訓みによるものではないが、古辞書類を参考にした。

※本稿では巻上二十四番と二十五番の詩及び詩序を取り扱う。

二十四 七言。九月尽日同賦送秋筆硯中応製一首(以心為韻并序)

夫本朝者詩国也

文章昌則主寿

礼楽興則世治

是以

聖上亦万機余閑

九月尽日

送*残輝*於筆硯之中

縱勝賞於旒辰之下

承恩者月卿

其人瑩清才而高步

応喚者風客

不幾蓋逸韻而近陪

方今

謝金廳兮耳驚

惜玉露兮目送

不欲登山只案轡策于文峯之雲

不要臨水只任舟楫於詞江之浪

遂使紅葉頻散染鷄距而追隨

玄英欲来当龜首而交替者也

昔晋十有四年

夫れ本朝は詩の国也

文章昌になるときは則ち主^{いのちなが}寿し

礼楽興るときは則ち世治まる

是を以て

聖上も亦万機の余閑

九月の尽日に

残輝を筆硯の中に送り

勝賞を旒辰の下に^{はしりま}縦にしたまふ

恩を承くる者は月卿

その人となり清才を瑩^{みが}きて高く歩む

喚に応ずる者は風客

幾^{いくば}くならずして逸韻を蓄へて近く陪す

方に今

金廳に謝されて耳に驚き

玉露を惜しみて目に送る

山に登ることを欲さず只轡策^{ひやく}を文峯の雲に案じ

水に望むことを要さず只舟楫^{しゅうしきゅう}を詞江の浪に任す

遂に紅葉をして頻りに散り鷄距を染めて追隨せしめ

玄英をして来たらんと欲して龜首に当たりて交替せしむる者也

昔晋十有四年

潘岳兼虎賁^{こほん}以作秋興賦

今宝曆十有四年

匡衡近龍顔^{りゅうげん}以献秋興詩云爾

謹序

感秋何処快沈吟

相送只資筆硯心

遮路紫毫羈旅^{きりょ}遠

解携墨沼悵望深

霜花餞席文章錦

風葉離歌朗詠音

好去今年商律候

事君万歳幾光陰

君に事^{つか}へて万歳幾光陰ならん

秋に感じて何れの処にか沈吟を快くす

相送るは只筆硯の心に資る

路を遮りて紫毫羈旅遠く

携を解きて墨沼悵望深し

霜花の餞席文章の錦

風葉の離歌朗詠の音

好し去れ今年の商律の候

君に事へて万歳幾光陰ならん

潘岳兼虎賁^{こほん}以作秋興賦

潘岳虎賁^{こほん}を兼ねて以て秋興の賦を作りぬ

今宝曆十有四年

今宝曆十有四年

匡衡近龍顔^{りゅうげん}以献秋興詩云爾

匡衡龍顔に近づきて以て秋興の詩を献ずと云ふこと爾り

謹序

謹みて序す

感秋何処快沈吟

相送只資筆硯心

遮路紫毫羈旅^{きりょ}遠

解携墨沼悵望深

霜花餞席文章錦

風葉離歌朗詠音

好去今年商律候

事君万歳幾光陰

【校異】

1、中一ナシ「中ト朱筆傍書」(東A) 2、製一制(無、山)

3、為韻一ナシ(陽、無、東A、京、山、祐、賀、鶴)

4、主一王(鶴) 5、世一也(鶴)一也「ミセケチシテ世ト傍書」(陽) 6、閑一ナシ(祐) 7、送一遮(内、陽、東A、東

B、無、神、京、賀、鶴、多)一~~鹿~~(山、祐)一遮「ミセケチシテ送ト傍書」(静) 8、輝一耀(陽、京、山、祐、神、賀、鶴)

9、旒辰一旅展「ミセケチシテ旒辰ト傍書」(内) 10、辰一展

(島、多)一II(判読不能)「ミセケチシテ展ト傍書」(東A)

秋に感じて何れの処にか沈吟を快くす

相送るは只筆硯の心に資る

路を遮りて紫毫羈旅遠く

携を解きて墨沼悵望深し

- 11、瑩―堂「ミセケチシテ瑩ト傍書」(内)
 12、逸―運(陽、京、祐、神、鶴)―運(判読不能)(東A)―運
 「ミセケチシテ逸ト傍書」(山)―運「ソノマヽト朱筆傍書」(東
 B)―運(判読不能)「ミセケチアリ」(賀) 13、惜―情「惜イ
 ト傍書」静―情「ミセケチシテ惜ト傍書」(東A) 14、露―霜
 (底本)内、陽、東A、東B、無、島、京、山、祐、神、賀、鶴、
 多ニヨツテ改ム―露「イト傍書」(静) 15、目―自(内A) 16、
 轡―輿(京) 17、於―于(静、東A、無、神、賀、鶴、多) 18、
 距―ナシ(鶴) 19、追―ナシ「追ト傍書」(内) 20、当―ナシ
 (陽、京、祐、神、鶴)―ナシ「脱字ト傍書」(山、賀) 21、貴
 ―責「ミセケチシテ責ト傍書」(静) 22、作―征「ミセケチシテ
 作ト傍書」(内) 23、今―ナシ(山、賀) 24、顔―眼(京)
 25、旅―於(陽、鶴)―於「旅乎ト傍書」(神) 26、深―涂「ミ
 セケチシテ深ト傍書」(内) 27、霜―ナシ「霜ト傍書」(内) 28、
 章―帝(鶴) 29、歌―秋(京) 30、商―高(鶴)―商(無)
 31、候―侯(島)

【押韻】

×○○××○_{下平声侵韻} ○×○××○_(下平声侵韻)
 ○××○○×× ×○○××○○_(下平声侵韻)
 ○○○×○○× ×○○○○×○_(下平声侵韻)
 ××○○○○× ×○○×○○○_(下平声侵韻)

【製作年次】

「九月三十日候内。有作文事。式部権大夫〔匡衡〕献題云、送秋

筆硯中〔心韻〕、即題者献序」(『権記』長保元年九月三十日条)
 「九月三十日己酉、禁闌命詩宴、題云送秋筆硯中」(『日本紀略』
 長保元年九月三十日条)

【語釈】

- ◎送秋筆硯中 詩題の典故未詳。
 ◎詩国 「君是旅人猶苦憶 我為刺史更難忘 境牽吟詠真詩国 興
 入笙歌好醉鄉」(『白氏文集』二六三八「見殷堯藩侍御憶江南詩
 三十首、詩中多叙蘇杭。余嘗典二郡、因繼和之」)「刺史雖三百
 盃莫強辞 辺土是不醉郷 此一兩句可重詠 北陸豈亦詩国」(『本
 朝文粹』卷九「春日於右監門藤將軍亭餞能州源刺史赴任勸醉惜
 別」慶滋保胤)
 ◎文章昌則主寿 未詳。「寿イノチナカシ」(『観智院本類聚名義
 抄』)

◎礼楽興則世治 「子曰、礼者即事之治也。君子有其事、必有其治。
 治国而無礼、譬猶瞽之無相。」(『孔子家語』「論礼」第二十七)
 「倭歌我国習俗、世治則興」(『後拾遺倭歌抄目錄』序)「世治
 礼楽興、時質和歌盛」(『承暦二年四月二十八日内裏歌合殿上日
 記』)

- ◎万機余閑 万機は帝王の諸々の政務。余閑は暇、余暇。毎日の政
 務の合間。「万機之余暇」「我君乘万機之余閑、賜一日之榮宴」
 (『江吏部集』下「七言。三月三日同賦花貌年年同応製詩」序)
 ◎残輝 夕日の光。残陽、残暉。「新筓短松低晚露 晚花寒沼漾残
 暉」(『千載佳句』人事部 文藻「題李端」元稹)
 ◎勝賞 すぐれた風景を愛でる。「我王 遇風景以不曠勝賞、属花

時以無廢嘉遊」へ『本朝文粹』卷十「春日陪第七親王風亭同賦繞
籬梅正開応教」序 橘正道

◎旒辰 天子の御座、玉座。旒は冕の前後につける玉だれ。辰は天子がこれを背にして坐すついたて。「密勿旒辰、臣人は仰へ」含元殿賦」李華へ「是以鶴板頻馳、近講席於旒辰之南面」へ『本朝文粹』卷十四「為覚雲僧都四十九日願文」大江以言

◎月卿 公卿の唐名。「卿士惟月」へ『書經』洪範。「月卿雲客三位以上云月卿公卿也。四位以下云雲客殿上人也。」へ『元和本下字集』へ

◎高歩 世俗を離れ高潔に歩む。「被褐出闔閭 高歩追許由」へ『文選』卷二十一「詠史詩八首」其五 左思

◎風客 風月の客。文人。「從事者露人雖多 応詔者風客不幾」へ『本朝文粹』卷十一「仲春内宴侍仁寿殿同賦鳥声韻管絃伎製」菅原文時

◎逸韻 美しい響き。すぐれた詩文。「愛菊高人吟逸韻 悲秋病客感衰懷」へ『白氏文集』三一八六「酬皇甫郎中对新菊花見憶」へ「若措良璞於荆巖之雲 誰聞鏗鏘之逸韻」へ『本朝文粹』卷八「沙門敬公集序」源順

◎金颺 颺はつむじ風。金風に同じ。秋風。「金風扇素節 丹霞啓陰氣」へ『文選』卷二十九「雜詩十首」其三 張協へ「似繫金颺 寒岸底 如余珠露古籬傍」へ『類題古詩』「菊殘秋意留」紀齊名

◎玉露 玉の如く美しい露。「孟秋之月 中略 涼風至、白露降」へ『礼記』月令とあるように、露は秋の景物。「丹鳥表色 玉露呈灑」へ「七契」昭明太子「林葉野花皆玉露 山頭水面只金

風」へ『類題古詩』「秋光処々同 一条帝」玉露延期携女兒 金風忘曆在南陽」へ『江吏部集』卷下「奉同菊殘留秋思詩」へ

◎不欲登山 不要臨水 潘岳「秋興賦」序による表現。潘岳のごとく実際に高い山に登ったり川のほとりに臨んだりせずとも、秋の愁いは十分に感じられるの意。「善乎宋生之言、曰、悲哉秋之為氣也、蕭瑟兮 草木搖落而變衰 摎慄兮 若在遠行 登山臨水送將歸」へ『楚辭』「九弁」宋玉

◎轡策 手綱と鞭。馬に乗ること。「寔治國之權、衡信馭民之轡策者也」へ『本朝文粹』卷八「弘仁格序」藤原冬嗣

◎文峯 詩文の峯。詩作の場。文章の道の高く峻しいのを峰に喩える。「文峰案轡白駒景 詞海艤船紅葉聲」へ『和漢朗詠集』卷上「九月尽」大江以言（『類聚本系江談抄』第四には詩題を「秋未出詩境」とする）へ

◎舟楫 舟のこいかい。舟。「馬鞍未解 早鞭重山之雲 舟楫未乾 急棹疊浪之岸」へ『本朝文粹』卷六「請被特蒙天恩以有勞恪勤諸司遷任遠江駿河等国守闕狀」平兼盛

◎詞江 詞は詩文。文峯に同じく詩作の場。文章の道の広く深いのを江に喩える。「詞海跳波湧 文星扠坐懸」へ『全唐詩』「猷榮陽公 五十韻」元稹「挹詞江而為朝夕詩池」へ『江吏部集』卷中「初冬於都督大王書齋、同賦唯以詩為友応教」序（『本朝文粹』卷九にも採る）へ「涉詞江而叩舷」へ『江吏部集』卷下「九日侍宴清涼殿、同賦菊是花聖賢忠製」（『本朝文粹』卷十一にも

採る)。「文路春行看不足 詞江秋望老弥深」(『本朝麗藻』卷

下「夏日同賦未飽風月思」藤原伊周)現存する一条朝詩文におい

て、「詞江」の用例は匡衡の作に類出する。元稹詩に用例のある

「詞海」を用いず「詞江」を使うのは、大江家に通じる江字に執

着があるためか。

◎鶏距ニ鶏距筆のこと。距は鶏の蹴爪。そのように鋒先が鋭く固い

筆。(「斯距也、如劍如戟、可擊可搏。將壯我之毫茫、必俛爾之

鋒鏑。遂使見之者書狂発、秉之者筆力作」『白氏文集』一四一八

「雞距筆賦」)

◎玄英ニ冬の異名。「爾雅曰、冬為玄英。一日安寧」(『芸文類

聚』 卷三歲時上「冬」)

◎龜首ニ龜の姿をした神獸である玄武をさすか。玄武は冬の精。冬

の始まりを玄武すなわち龜の首と言ったものか。存疑。「時為冬、

冬之為言、終也。其在北方。一中略—其神玄冥、玄冥者、入冥

也。其精玄武。」(『白虎通』五行)「玄武、龜也、龜有甲、能

禦侮用也」(『礼記』曲礼上「疏」)

◎昔晋有十有四年ニ潘岳「秋興賦」序による。「晋十有四年、余春

秋三十有二、始見二毛、以太尉掾、兼虎賁中郎將」(『文選』卷

三「秋興賦 并序」)

◎宝曆十有四年ニ本詩及び詩序が作成された長保元年(九九九)は

一条天皇即位の年寛和二年(九八六)から一四年目にあたる。

◎沈吟ニもの思いに沈む。「但為君故 沈吟至今(良曰、君為知友

也。沈吟喻深思之意)」(『文選』卷二十七「短歌行」曹操)

「詩総六義、風冠其首。斯乃化感之本源、志氣之符契也。是以怛

◎遮路ニ別れを惜しんで行く手を遮る。「耆老遮歸路 壺漿滿別筵」

(『白氏文集』二三五三「別州民」)

◎紫毫ニ紫毫筆。兔の紫色を帯びた毛で作る。ここでは単に筆の意。

「紫毫筆、尖如錐分利如刀、江南石上有老兔、喫竹飲泉生紫毫。

宣城之人采為筆」(『白氏文集』一六六「紫毫筆」)

◎解携ニつないでいた手を離す。友人と別れること。「憑高送遠一

悽悽 却下朱欄即解携」(『白氏文集』九二二「北樓送客歸上

都」)

◎墨沼ニ文章を書くこと。張芝(伯英)が池の辺で書の練習をした

ために池の水が墨で黒く染まったという故事を踏まえる表現(北

山田正氏の御教示による)。「張芝臨池學書。池水尽黒」(『芸

文類聚』卷九水部下池所収「王羲之書」)「弘農張伯英、轉精其

巧。家之衣帛、必先書後染。臨池學書、池水尽黒」(『芸文類

聚』卷七十四巧芸部書所収「四体書」衛恒)十七「暮春心製」墨

沼の語釈を参照。

◎悵望ニ嘆いて眺める。「停驂我悵望 輟棹子夷猶」(『新亭渚別范

零陵』謝朓)

◎霜花ニ通常は霜そのものを言うが、ここは「霜菊」、霜の降りた

菊の花の意か。平仄の關係で入声の菊を避け、平声の花を用いた

もの。「霜菊花萎日 風梧葉碎時」(『白氏文集』一二五四「寄王

秘書」)「想像霜華發 悲傷晚節昏」(『菅家文草』卷四「寄白

菊四十韻」)

◎文章錦ニ見事な文章。詩文の美しさを錦に喩える。「詞条弦直

文藻錦摛」(『本朝文粹』卷九「北堂漢書竟宴、詠史得蘇武」紀

在昌)

◎風葉Ⅱ風に散る木の葉。

◎離歌Ⅱ別れの歌。「敢以別恨 宜代離歌云爾」(『本朝文粹』卷九)

「春日於右監門藤將軍亭、饒能州源刺史赴任勸醉惜別」慶滋保胤

◎朗詠音Ⅱ詩文を澄んだ声で高らかに詠じる、その声。平安朝における朗詠の語の使われ方の変遷については青柳隆志「朗詠」という語について―中国詩文から『和漢朗詠集』へ―(『中古文学』四七号・平成三・五月)(『日本朗詠史 研究篇』平成二一年二月所収)に詳細に検討されている。

◎好去Ⅱさらば。お元気で。別れの挨拶。唐代の俗語「好去今年江上春 明年未死還相見」(『白氏文集』五九二「送春婦 元和十一年三月十一日作」)「好去春三月 年加老不加」(『菅家文章』卷二「賦得春深道士家」)白居易が惜春の詩に用い、道真も白詩に倣って春の詩に用いたのに対し、匡衡は惜秋の詩に用いた。

◎商律候Ⅱ角、徵、宮、商、羽の五音の一つ。五行では商の音律は金にあたり、秋の音である。すなわち商律候は秋のこと。「季秋月、―中略―其音商、律中無射」(『礼記』月令)

【通釈】

七言。九月の終わりの日に皆で「秋を筆硯の中に見送る」という題で詩を作る。帝の仰せによつて作る。

そもそも我が国は詩の国である。

文章が盛んであれば我が君の御齡は末永く、礼楽が興れば国は治まるのである。

このことによつて、我が君も日々の政務の合間に九月の終わりの日の今日、

秋の最後の夕日を筆や硯のうちに(詩文を作ることによつて)見送り、御座所にて美しい景色を心ゆくまでご覧になる。

(帝と共に秋を見送るといふ)恩恵に浴するのは公卿たち。

この方々は清らかな才を磨き俗世から離れたこの場所が高潔な思いを抱き歩をお進めになる。

帝のお召しに応じるのは文人たち。あつという間にすばらしい詩を作つてお側近く控える。

今この時、別れの挨拶をするかのような秋風の音にはつと驚き、清らかな露を惜しんで秋を見送る。

秋を送るのにあの潘岳のように山に登ろうとは思わない。ただ峰の彼方の雲に向かつて馬を留めるように、この詩会の場で秋の想いを詩に案じるのみだ。

また、水辺に赴く必要もない。長江の波に舟を任せるように、この場で詩想の浮かぶままに秋を惜しめばよい。

やがて、紅葉が頻りに散る中筆を染めて行く秋を追つていっても、ついには冬が訪れて冬の精玄武が顔を覗かせ季節は移つていくのである。

昔、晋の十四年に虎賁中郎將を兼任していた潘岳は「秋興賦」を作りました。

我が君の御代十四年目の今、私匡衡はお側近くお仕えして「秋興詩」を作り献上する次第でございます。謹んで序を奉ります。

行く秋を惜しむのどこでもの思いに耽ればよいのか

秋を送るにはひたすら筆を執つて詩を賦すのみ
筆の力で秋の行く道を遮つて留めようとしても、旅の前途は
余りにも遠い。

携えた手を離すように秋に別れを告げて、硯に向かい詩を作
れば、悲しみはいっそう深い。

霜にうつろう菊の花は送別の席での詩のように美しい
風に散る木の葉の音は別れを悲しむ歌を朗詠する声のよう
さらば、行くがよい、今年の秋よ

我らはいつまでも我が君にお仕えし、これからどれほどの年
月を過ごすのだろうか（幾らでも季節は巡ってくるだろう）

二十五 初冬感興〔於内府作〕

秋過物色変林藜

興味自催在此中

酒熟始携東閣月

詩成高詠北窓風

〔于時宴北窓故云〕

樽前不患身閑素

醉後応誇面暫紅

侍講二年心独感*

韋賢昔学大江公

秋過ぎ物色林藜に變ず

興味自づから催して此の中に在り

酒熟して始めて携ふ東閣の月

詩成りて高く詠ず北窓の風

〔時に北窓に宴す故に云ふ〕

樽前 身の閑素なるを患はず

醉ひて後応に一面の暫く紅なるを誇るべし

侍講二年心に独り感ず

韋賢も昔大江公に学べり

- 1、詠—談（底本）諸本ニ依リテ改ム
- 2、侍—詩（内、島、多）
- 3、感—盛（内、島、多）—感々（鶴）

【押韻】

○○×××○○	◎	○○×○○××	◎	〔上平声東韻〕
×××○○××	×	○○○××○○	◎	〔上平声東韻〕
○○○×○○×	×	××○×××◎	◎	〔上平声東韻〕
×××○○××	×	○○×××○○◎	◎	〔上平声東韻〕

【製作年次】

内府が藤原道兼を指すとすれば、道兼内大臣在任中の正暦二、三、四年のうちいずれかの十月。

【語釈】

◎感興⇨興味、興趣を感じること。「唐興二百年、其間詩人、不可勝数。所可举者、陳子昂有感遇詩二十首、鮑飭有感興詩十五首」

〈『白氏文集』一四八六「与元九書」〉

◎内府⇨内相府。内大臣の唐名。匡衡と関わりが深い藤原道長は内大臣経験がない。匡衡が粟田障子詩を作った藤原道兼か。道兼の任内大臣は正暦二年（九九二）九月七日、その後正暦五年八月二八日に右大臣に転ず。↓木戸「大江匡衡 粟田障子十五連作」

〈『文献探究』第二十七号 平成三年三月〉

◎物色⇨風物。景色。「日暮行采婦 物色桑榆時〔善日、物色桑榆、言日晚也〕」〈『文選』卷二十一「秋胡詩」顔延思〉

◎林藜⇨草木の茂ったところ。林。「莫莫紛紛 山谷為之風森 林叢

【校異】

為之生塵」へ『文選』卷八「羽獵賦」楊雄

◎酒熟ニ新酒ができる。「酒熟無來客 因成独酌話」へ『白氏文集』三一九六「冬初酒熟 又一首」

◎高詠ニ高らかにうたう。底本「談」は下平声談韻の字であり、二四不同の詩律を犯す。詠ならば去声映韻の字で問題はない。↓金原理「平安時代漢詩人の規範意識」注(24)へ『平安朝漢詩文の研究』一九八一年

◎北窓ニ北側の窓。北向きの部屋。書齋など私用の部屋にあてる。

「今日北窓下 自問何所為 欣然得三友 三友者為誰 琴罷輒奉酒 酒罷輒吟詩 三友遞相引 循環無已時」へ『白氏文集』二九八五

「北窓三友」へ「暑月貧家何所有 客來唯贈北窓風」へ『白氏文集』二五二八「新昌閑居。招楊郎中兄弟」「結宇雖疎戶牖宜 自然屋有北窓在」へ『菅家後集』「詠樂天北窓三友詩」

◎樽前ニ酒樽の前。「花下忘帰因美景 樽前勸酒是春風」へ『白氏文集』六一六「酬哥舒大見贈詩」

◎閑素ニ静かで質素なこと。閑職にあつて貧しいこと。「外弥扇囊 黄之風 内何憂閑素之日乎」へ『本朝文粹』卷六「請特蒙天恩諸國 受領吏秩滿、并臨時闕旧吏新叙相半被拜任状」藤原倫寧等「何 必閑素之儒者、得書大般若」へ『本朝文粹』卷十三「於尾張國熱 田神社供養大般若經願文」大江匡衡

◎面暫紅ニ酒の酔いによつて、若者のごとく顔の血色が良くなる様子。「何処難忘酒 霜庭老病翁 暗声啼蟋蟀 乾葉落梧桐 鬢為愁先 白顔因醉暫紅 此時無一盞 何計奈秋風」へ『白氏文集』二七五九

「何処難忘酒」其四

◎侍講二年ニ『二中歴』第二「儒職歴」によれば、匡衡は宇治殿藤

原頼通の侍講であつた。しかしながら、頼通が内大臣を拜したの は匡衡没後の寛仁元年である。道兼の侍講、侍講をしていたこと については未詳。

◎韋賢昔学大江公ニ韋賢は前漢の儒者。霍光と共に宣帝を立て、丞相となり、扶陽侯に封ぜられた。「蒙求」「韋賢滿籟」の故事で知られる。大江公は江公、前漢の儒者。韋賢が大江公に詩経を学んだことは『漢書』「儒林伝」に見える。「韋賢治詩、事博士大江公及許生」晋灼曰、大江公、即瑕丘江公也。以異下博士江公、故称大」。又治礼至丞相」へ『漢書』「儒林伝」。「漢書、韋賢字長儒、魯国人。丞相致仕、自賢始也。其子玄成、字少翁。位亦至丞相、封范陽侯。賢常曰、遺子黄金滿籟、不如一經」へ『書陵部本古注蒙求』二六五「韋賢滿籟」へ丞相となつた韋賢がかつて大江公に学んだ故事を、侍講大江匡衡に内大臣道兼が学ぶことに重ね合わせる。

【通釈】

初冬、興趣のままに作る「内大臣邸にて作る」

秋が過ぎ（冬になり）林の景色は様変わりした

この景色を眺めると自ずと興味がわいてくる

この冬初めての新酒を携え内大臣様のお宅で月を愛でる

詩ができれば北窓を吹く風に合わせて高らかに詠う

「この時北側の部屋で宴を開いたのでこのように言う」

酒を前にしていると我が身の貧しく質素な有り様など気にならな

酒の酔いの助けを借りてしばしの間若者のような頬の色を誇

ろうではないか

内大臣様の侍講を勤めて二年、私は心ひそかに思う

あの学者であり丞相であつた章賢もその昔大江公に学んだのだと

(きど ゆうこ・鹿児島県立短期大学助教授)